松平家記

中

内閣文庫
和 書 類
三一四〇六 號
三 冊
五五 函
一九 架

史 一四二

内閣文庫
番號	和	31406
冊數		3(2)
函號	155	352

国立公文書館
National Archives of Japan

110

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

松平家記巻之中

従四位松平頼聰述

五代讃岐守頼恭

頼恭義ハ同姓松平大学頭頼貞の第三子初代讃岐守頼重弟刑部大輔頼元孫元文四年巳未頼桓重病の處男女共實子無之候ニ付頼恭へ家相續仕き度相願置死去仕九月十八日廿九歳ニ而家相續被仰付候

○家督之後第一ニ家中の者共人材取立方厚く世話仕武術之義ハ不及申高松の學校并江戸邸

内ニ而も學問所相立経史講習詩文章の業ぬも修
行仕を申候
○先々代頼豊在職中より勝手向甚不如意ニ而
上下とも困窮ニ付先代頼桓義追々勝手取直し
の目途相立自身手元より諸事省略仕嚴く倹約
取行申候ハ共家督當分段々不意の物入有之未
た歩も付不申候内先去頼恭相續仕候處是又當
分種々の物入并領分凶作等打續弥不勝手ニ相
成候ニ付家督より三ヶ年目寛保元年辛酉八月
廿日倹約の義左の通於江戸家老共へ申聞候
勝手向兼て不都合の上近年別して物入多く此
後取續の様子相見不申候由先達て承苦労ニ存
候處又候今秋ハ國元風雨ニ而損毛多く半作の
由承候當年来春ニ至候ても新規物入事も相見
候　右の通ニ而ハ家中渡方等も不足ニ可相成
哉と甚氣の毒ニ思ひ候只今迠とくも何れも油
断ハ有之間敷渋方ニ而も指て物好の存寄も無之
候へ共猶又事每ニ心ぬ付近年の内ニ勝手何卒

取直シ家中渡物等も不足無之様致度存候事ニ
候然レ共公儀事ハ止メ可申様も無之候内證の
義ハ如何様共致見苦敷義ヲも堪忍いたし取續
第一ニ存候依てハ何レも表向の景氣ヲ止メ實
義ニ申合近年の内ニ勝手取直候様存込勘辨可
仕候此方ニても隨分申聞候義ハ許容致可申付と
存候何卒万事定法ニて仕合せ候様可仕候新規
の事も有之候ハヽ委く吟味ヲ加へ大抵無據事
迄も相止候程ニ致時ニ此方へも可申聞候奉行

用人勘定奉行等ハ不及申義ニ候へ共其外勝手
向ニ拘り不申役義の面々ニ候とも一同ニ為筋
ヲ可存義ニ候間何レニ不限役人と相心得假令
我等手元より申付候義ニ候とも物入相増候義
費有之候譯等有之候ハヽ利害得失相考申付候
通りニてハ勝手の為不宜段具ニ可申聞候其譯ヲ
隨分聞届可申候夫とも不申付て不叶事ニ候ハヽ
其子細申聞候上可申付候此以後ハ少しの義ニ
ても遠慮不仕為ニ相成候義ハ此方存寄ヲも押

迄ニ得失の譯幾篇も可申聞候存念有之義ハ指
扣申付ニまゝのを取計候ハ不忠の至ニ存候軽き
役人迄も右之趣ニ相心得を可申候贈答向一巻
小納戸一巻臺所作事方等ハ別て物入の場所と
存候間猶以瑣細の義迄心を付勘辨仕事々此方
へも可申聞候何れも勤方悪敷とハ不承候へ共
此上何卒相志まり近年の内勝手向取直可申存
寄故申聞候
一諸役所手代共ハ軽き者共故分限ニ相應の身
持等も可仕義ニ候若心得違候歟又ハ不勤の
譯も有之候ハヽ取替可申付候総して景氣一と
いたりニ相勤候者ハ難用立義ニ存候軽輩ニ
ても於諸役所ハ手代共の勤第一の義ニ聞及
候間實義なる者丁寧なる者共を撰可申付候
○右の通申付江戸高松とも倹約専ニ取行候へ
共年来の不勝手ニて借金莫大ニ有之候故跡引
けと申姿ニて更ニ其驗相見不申弥逼迫ニ及候
ニ付寛保二年壬戌八月三四ヶ年の間内證逼塞

と相心得重き倹約取行候様申付候尤初代以来
當時迄家老奉行ニ勝手懸りと申ハ無之領内收
納向勝手繰合を方其餘とも金穀ニ係り候事件
ハ夫々引受の役人共より奉行共へ申立家老共
へ評議の上承届品ニ寄當主存寄成も承り候上
指圖致候仕成ニ御坐候處此時始て番頭ニて奉
行兼帯相勤候間宮武右衛門と申者へ郷中用向
勝手用向共引受頭取申付勝手締り方の義了簡
ニ相任せ候旨申付候（武右衛門義ハ先々代以来奉行相勤精忠の者ニて政）

躰ニ熟練致様々の勤功有之國中人望も有之者
故如此申付候由ニ御坐候○紫野彦輔邦彦文恭
院殿へ上り候書の中ニ賄と申物程政道の邪魔
ニ相成候物ハ無御坐是ハ和漢ともニ其例多き
ことニ御坐候へ共近く御當代の物語ニ可申上候
松平讃岐守用人成相勤候間宮武右衛門と申者
殊の外潔白の者ニて賄成少しも受不申候處あ
る時人ニ物語候ハ拙者賄成いうし時々見廻媚諂
ひ候者ハ奸佞なる者うかとハ存候へとも其者
成にくしとハ不存候又上へ忠義成存し身成正
しく持候者ハゝく音信贈答も不致深々と見廻も
不致候者ハ扨々殊勝なる正しき男うふと存候
へ共其人成いとおしくとハ不存候拙者ハ少しも
賄成受不申候てさへ左様ニ存候へハまして賄
なと成受候人ハ上の御掟成曲て其人々贔負成
いたし候もことハりにて候と申候よし承及候
云云

八月廿七日右武右衛門宅へ諸役人呼寄左の通
申渡候
各何れも兼て存知の通御勝手向近年別て
御物入相續れ御借銀も夥敷第一御借銀方
當年ニ至必至と取捌難成其上年々御入用
相増候様成行候ニ付假令御借銀無之候て
も只今の御振りてハ御所務ニて御世帯難
相續候御家中四ツ成と申義御定法の第一
ニ候處ケ様ニてハ永代四ツ成の御定法も
難相立候然處此度重れ御勘辨の思召被仰
出如何様なりとも存寄ニ取計見可申候御前
御用の品ニても申上候義少しも遠慮仕間
敷候御家中渡方の義ハ只今より減し候て
ハ難取續候其外の義ハ御作法ニ初相改候
て何様の義ニても御止メ被遊四五年の内ハ
御内御遍塞可被遊思召の由重く被仰出候
ニ付此度御取箇以御暮の御定法ニ相立
近年の内ニ御家中渡方も御定法相立候様

致度少しも此の外の義ハ御遣ひ道成相止
申候総して江戸表公儀の御様子諸家の振
成考候得ハ別して御家の御様子万事結構
ニ相見候ニ付万端の御様子成引替改候て
随分事軽く被仰付候様ニ申上候勿論御内
御逼塞の思召の内ハ御遣ひ道の内御作事
一件ハ雨溜留一と通御贈答ハ御断ニて一
圓相止め御賄方江戸表ゟ御仕出相止迄
御料理被下又ハ御次向の面々仕出の類一

円ニ相止迄申候如此事成相止候て暫御世
帯諸指引等の御歩ミ立申積ニ候得ハ三四
ケ年の内の積ニ候依之御定法ハ一と通元
禄年中の法成以近年の御遣ひ済ニ見合相
立置其内ニて右暫一円ニ相止候分ハ猶又
部立成以三四年の積ニ相極候て御出目成
考可申候総して御定法の義天和年中より
格相極候へ共元禄十五年源節様被仰付諸
事御定法相立御世帯御法式相立至極の御

立方ニて八九年の内ニ万々相整申候然る
慶寶永の初より万事御定法の名目立候計
ニて御世帯の取計ひ元御不足の目當無之
凡四十年来御定法帳ハ相極なから右の目
當を以取計の仕方無之候ニ付元禄年中の
御定法ハなのかう相止元拂引合を候て
毎年過不足相考候仕方も断絶致候故元御
不足何程と申義を取計澄候役人も不存御
入用程遣捨ニ成御不足ハ可成程御借銀ニ
て埋候様相成候ニ付遣ひ崩しと申仕方ニ
成行候依之何分此度より先御借銀調法を
相止迄御分限の御取箇切ニ御遣用をなく
毎年の過不足御勘定を取結相糺候て夫々
の役所の御定法切れ候へハ其由縁を極来
年の御入目を減し候懐を遂吟味其役所役
所ニて了簡致を何分不足無之様致可申候
又御定法餘り有之候へハ其役人の規模を
御沙汰ニ及右の御銀を有餘ニ致除置可申

候總して元禄年中の通夫々の役所近年の
御遣ひ道并以猶又千万の品ニ候とも一色
ツヽ吟味致たし候ハ只今迄ヶ程ニ員數の
御入用ヶ様ニ被仰付候ヘハ是程相減し申
候と隨分御勘略ニ其品々御用うなりニ調
相濟候訳并夫々より吟味致御定法の御銀
減し候て御用被行候御仕方隨分了簡の上
帳面ニ仕立夫々より早々可被指出候猶又
右仕方の義ハ日々御定法引除役所へ相談

聞合有之候ハヽ拙者承届指圖可致候諸用
の御遣ひ道ハ限り無之候ても夫々の役所
役所近年の御勘定帳庭帳并以夫々ニ品并
極御勘辨并致候工夫一事々々ニ遂吟味候
得ハ少しも御勘辨の落申義ハ無之様ニ罷
成候是以元禄年中の御作法まして全く此度
私慮并以て取立申義ニ無之候然ろ處年久
數々様の取計無之成行候ニ付近年の御勘
辨と申ハ紙炭蠟燭等の渡方此ミの義遣ひ

道委く吟味も無之員數計押減し候を詮と
致御勘辨の仕方と覚候趣ニ役人共何れも心得違
候左様ニてハ不宜懐の遣ひ道吟味の上極
不申候てハ被行不申事も有之候尤此段ニて
も御勘辨ニて無之ニてハなく候へ共右の
渡方ハ品々渡候役所の御定法の一ツニて
夫々可入程の訳を遂吟味相極置御定法の
外ハ決して相渡不申候へハ夫ニて事済候
吟味詰候へハ事足候故御作法ニ成行候若

撰の遣ひ道有之趣ニ候ハヽ急度及御沙汰
御定法を破り候御咎も有之程の義ニ相成
可然事ニ候第一紙なと難相定品を以申候
へハ近年一ヶ月の留帳幾通何程其外相知
れ候遣道是々又ハ難相知取遣の手紙指紙
諸書付近年の遣ひ道を引合き大數餘分を
以積り立候ハヽ相知可申候其積りを以相極
可申候

一各御役義の神文有之上ハ御上へ對し後闇

き義有之間敷ハ勿論ニ候へ共今度の御定法立ハ御世帯の御振替り候義ニて御大切の事ニ候間少しもゆるみ跡戻りニ相成候てハ其詮無之候ニ付人別神文可被致候拙者義取計依怙無之趣各別の神文各ニ對し致可申候

一右申達候通別して御定法替り候役所ハ一役同断の心底ニて諸事同役の通相互ニ遂相談可被申合候近年ハ何となく人々役所の我儘立候様成行候故銘々役所の為ニ儘存他の役所の障儘不考或ハ勤方一と通表向ハ済候へ共内意の實義薄き様ニ成行おのつから締り申さぬ御為ニ不相成候此段第一申合今度より盡粉骨夫々の持前他役所の出精ニ劣り不申様相励可被申候出精の次第何分及御沙汰可申候間弥御取立も可有之候

一夫々役所の義ハ勿論譬ハ他役所又ハ無構

義ニ而も御國中の義ニ候へハ御為筋諸民
の為ニも相成候義或ハ御作法重過候趣事
軽く可相済次第各工夫有之氣付被申出候
様致度候
一総して各支配諸手代末々迄も此等の趣篤
と得心致候様幾度も申聞随分晝夜励候程
の心持ニ相成候様可被致候末々迄励ニ申
義無之候てハ大事成就難致候然ル上ハ志
出精等の甲乙能々見立可被申出候此方ニ
おゐても篤と相考致出精志正直なる者ハ必定
御取立も可有之候間急度可被申立候ケ様
の義拙者ニおゐてハ毛頭依怙贔負致間敷
候間各勿論一図ニ支配贔負の心無之正直
ニ可被相心得候
一万事役人の筋悪敷相成候義ハ少分之賄賂
振廻私の手廻しの心より心得違候事間々
有之義ニ候間随分正直成先として御用相
達候町人或ハ入札物等の訳ニ付随分相慎

候義第一ニ候左様の事ニ心得違有之役人
古来一ト人も相續比候義無之ハ何れも存知
の事ニ候志律義ニ正直成専と相勤候類ハ
遂ニ御取立有之義是又目前ニ多比義ニ候
ヘハ銘々得失成存候て隨分相慎励候様致
度候

右之趣とも篤と支配方へ申聞諸役人一致ニ
實意ニ相励令度被仰出の趣跡戻り不致様隨
分可被申合候

右の通ニて定法入用方専取調中同年十月朔日
武右衛門病死仕候ニ付十五日家老小夫兵庫よ
り左の通諸役人へ申渡候

暫の内御内證御逼塞被遊重御倹約被仰付
候ニ付御世帯一巻郷方とも間宮武右衛門
ヘ引受相勤候様被仰付万々取調有之候處
御勘辧等の義ハ未ゝ押方も付不申内武右
衛門病死致候依之諸役人心得違も有之心
申ゝ之有之候てハ重く被思召付候義其詮

も無之候一ハ不忠第一ニ被思召候奉行共
新役ニて前後不存義ニ候間諸役人手前手
前より御為宜様ニ日夜了簡仕御勘辨の義
少しも遠慮不仕氣付の義奉行中へ可申達
候右の通故當分引受ハ不被仰付一同諸事
取計候様被仰付候武右衛門罷在候ヘハ無
據筋合承届緩ミ締りも可有之候得共當時
何れも不案内の事ニ候得共少分の義も緩
ミ有之候てハ夫々の役人油断ニ可相成品

ニ寄急度御咎も可被遊候間逐一奉行中へ
申達入念取計可申候永々の義ニも無之押
形相極候内の事ニ候ヘハ晝夜出精可仕候
右以後上下一致ニ相成必至と倹約取行候へ共
年々不意の物入相重り候上折〳〵領内水旱
等の災ニて凶作打續弥不勝手の中延享二年乙
丑の冬幕府御代替ニ付京都への御使相勤右入
用方莫大の義ニて不得已領中へ大數の用金然
も申付候ヘ共猶行届不申翌丙寅ニ至り候てハ

家中の者共知行物成の渡方相成兼漸く扶持米
かけ相渡候仕合ニ付弥他借金相増候而已ニて
返済方行當り無餘義領中山々の松雑木とも根
伐ニ致賣拂今日の急状凌候程の躰ニ相成候間
同年冬兼て内證逼塞中ニ候ヘ共猶今年より来ル
辰年迄三ヶ年の間格別重キ倹約申付家老小夫
兵庫勝手向引受申付倹約筋の義委任致扠又家
中の者共ハ是迄借上け米有之三ツ物成相渡有之困窮の
義ニ候得共色々手違の義有之暫の内ハ扶持米

渡の外更ニ手當無之此後少も手當相整候ハヽ
貳ツ成可遣旨申付依之五節句式日等祝儀の出
仕成も差免重臣の分計一ヶ月一度ツヽ機嫌伺
ニして出仕候様申付候翌延享四年丁卯より家
中へハ貳ツ物成相渡遣申候
○延享四年丁卯七月十日刑法相改定申候
付火致候者　磔
人殺　磔或ハ斬罪梟首又ハ討捨
城内へ入候盗人　磔又ハ斬罪梟首

銀子似せ包致候者　斬罪梟首
家中へ入候盗人　斬罪梟首又者國追放
押入盗人　磔又ハ斬罪梟首
於町郷小盗人　國追放
立帰者　初追放致候以後三度立帰候ハヽ不及詮議死罪　寶暦二年壬申九月廿日初追放致候以後一度立帰候ハヽ不及詮議死罪但一度立帰候ハヽ盗致候ハヽ死罪申付候筈ニ相改候
右の外非エ事或ハかわた者かわう言の類
國又ハ郡城下追放

重き追放躰乱髪中追放長髪乱髪縄帯
○寛延二年己巳十二月十五日近年凶作打續百姓共困窮ニ付為救領中へ米三千五百石貸遣是迄の貸付銀米納方其餘百姓共山川ろきニ可相成品々相弛免遣申候翌庚午春ニ至猶困窮ニ付米貳千三百石貸遣申候
○寛延三年庚午春連年の凶作ニて百姓共懐相痛別て高免の田地持共難渋ニ付高免所の分ハ歩通状以一ヶ年限ニ免貸遣申候此米三千石餘

此以後引續年々貸遣後ニハ年限を以蕃を被廃
候年迄貸遣申候民間ニ而ハ是を貸免と唱申候たとへハ免七ツの場所貳歩の
貸免ニて六ツ八歩或ハ免六ツ五歩の場所壱歩五厘の貸免ニて六ツ三歩五厘相納候と申類ニ
御座候

○同年八月六日諸役人へ直書を以重き倹約申
付候てより餘程年數も有之候處何れも退屈も
不致無懈怠出精致候ニ付追々入用向も相減候
段委く兵庫申聞大慶の事ニ候此砌有餘も有之
候ハゝ甲ゟ世てりニも可申付候へ共去年以来臨
時の入用有之未と歩ミも難立段氣の毒ニ思候
然上ハ弥退屈も可致事ニ候へ共為を存相励出
精可致候様ニ手代式ニ至迄委く可申聞旨申付
候

○同年十一月朔日今以不勝手ニて家内共賄料
の内借受候分ハ未ゟ戻し不申候得共當暮より
家中の者共へハ三ツ物成相渡と申候家中物成借り上け
候節ハいつれも賄料の内を歩通を以年限中借受候義ニ御座候

○寶暦二年壬申九月廿日此以後死刑ニ申付候

者軽き回向仕遣候様申付西方寺と申浄土宗の
無縁寺へ刑人壱人ニ付銀壱両宛遣回向仕させ候
義此後定例ニ相成申候
○寶暦三年癸酉近年猪鹿多く相成近郷里分へ
出作物荒し百姓共難義ニ付度々狩候も申付候
へ共猶相止不申候ニ付四月十日領中山分の猟
師共へ不断ニ打留候様申付打留候者へハ猪一
頭ニ付米七升鹿一頭ニ付同四升ツヽ遣し今年
より寶暦六年丙子ニ至猪千五百六十八頭鹿三
千五百五十八頭打留申候
○寶暦四年甲戌打續米下直の處度々凶作有之
收納米相減し其上不意の物入相重り勝手向大
ニ指支他借銀も最早相整不申候ニ付領内富民
共へ申付過分の借銀致相凌候得共参勤帰國の
入目も相整兼候仕合ニ付不得止五月以後家中
貳ツ成の渡方ニ申付候此節家中の者共へ家老共より申渡候文中此度
ニツ成の渡方ニ被仰付此上暮ニ至御救米等被
下候御有餘も不相見候是迄數年御借り米有之
又候被仰出候へハ久々の義故何ともむつかしく
可致候肩状ふき絶悔ミ罷在候ても急ニ時節直

り可申様も無之候一ハ御家中の者共褒貶ニ不
拘如何様共取續可申候時節を憚り相慎候事も
可有之候へ共向後ハ妻子等ニ至迄相成候ハヽ
折々の遊與も不苦候困窮なからも窮屈ニ無之
様ニとの思召ニ候间法を背候事ハ格別其餘ハ
御構ひ不被遊候上ニも御膳を初御手廻りの義
等ハ御自身御心を被為付御倹約被遊御失却も
無之義ハ御遊與の筋も可被遊候御倹約中と申
得ハ自然と慎申候て事窮屈ニ相心得候様御聞
被遊候久々の義左様ニてハ世间へ心遣迄相増
候様可罷成と思召候且又武藝の義ハ無懈怠出
精致候者も有之心懸尤の事ニ思召候御倹約中
ハ御覧充見分等も御用捨の事ニ候へ共數年の
義ニ付向後ハ御用捨なく御覧見分等も可被仰
付候竹刀木刀相改ニ不及稽古の品其儘用ひ可
申候御倹約中ハ前々出仕も御免被遊候へとも
久々の義故五節句式日の御祝儀不申上義も如
何ニ被思召候间御祝儀ニハ罷出可申候不對の

上下不苦候不勝手ニて出仕
難成者ハ不参不苦候云々

○同年八月朔日小夫兵庫義病氣ニ付勝手向引
受指免右用向奉行共申合取扱候様申付候

○寶暦五年乙亥秋山田郡西鴻元村西海手遠干
鴻へ新塩濱内證ゟ築立を釜屋貳拾五軒前成功
候處地性汐付甚宜く其後年を経候て上品の塩
産出致領中第一の良濱と相成申候兼て右の干
鴻塩濱ニ可相成宜き場所ニ付沖手へ二三百间
計乱杭を打洲寄を致堤株ニ仕追て塩濱築立相

成候様仕度旨去々甲戌春百姓共願ニ付其通申
付塩濱築立方ノ義評議仕せ候處程能成功候者
永々國益ニ可相成候得共西風ニて波荒く相當
候場所故成功の程無覚束第一勝手向指支の中
大分の入用も有之義ニ付先無用可然と役人共
決議の趣申聞候處頼恭存意ニハ永々の國益疑
無之候ハヽ只今の入費ハ如何様ニても指繰何卒
築造申付度再度評議仕せ候得共何分成功の處
を危ミ存候由ニて達て延引可然旨申出候依之

先試方内證より手元金の繰合を以築立せ可申
筈ニ相成側用達木村亘と申者ヘ右用懸り申付
築造取懸り西の方堤餘程築立候處ニて風雨有
之大波ニて土沙悉く推崩し流れ捨り申候を再
築立翌年ニ至大方堤成就の頃又風雨ニて悉く
打崩し申候最初ニ無用可然と申合候役人共も
斯可有義と申候ニ付亘義甚迷惑致兼てヶ様の
義も可有之哉と存御延引可然と私よりも申上
候ヘ共強て被仰付候故不得已取懸り候處両度

ニて流れ拾ひ其費不少候最早御無用相願候旨
申聞候頼恭申候ハ未さ成功無之ニ折悪く風雨
烈く土石状流しけるハ是非も無之候へとも年
年強き風雨可有事ニも無之候間無心配又々取
懸り候様申付候直弥迷惑致然らハ此義別人へ
被仰付私ハ御免相願度と申候へハ打笑候て堤丈夫
ニ築立候上ハ假令波風烈くとも推崩る事ハ有
間敷なり左様ニ弱き心ニてハ何事ニよらす大
事成就致候物ニて無之と達て申付候ニ付不得

已又々取懸り順宜く三度目ニて成功候由申傳
候此以後頼恭代并次々の代ニても領中海手所々ニ塩濱築立き何れも宜く成就仕候へ共塩ハ品位ハ此西潟元状以第一と仕候

○寶暦七年丁丑十月より領中始て銀札通用申
付候其品左の通

百五拾目札 是ハ指支有之後年通用相止引札ニ申付候

百目札

三拾目札 是も後年引札ニ申付候

貳拾目札 是も後年引札ニ申付候

拾文目札

壱文五分札 是も後年引札ニ申付候

壱文目札　　五分札　是も後年引札ニ申付候

三分札　　貳分札

以上十品金銀銭ニ取交通用申付候

一城下兵庫町ニ札會所と申役所相立役人相備右役所の隣家ヨ掛屋職の者住居日々手代共銀見共呂連札會所へ相詰正金銀々札引換の義何時ヨよらし無指支取扱申候夜中たり共無餘義引換申出候へハ宿番の者承届引換申候

一正銀百目持参銀札ニ引換申出候ヘハ銀札百壱匁相渡銀札百貳匁持参正銀ヨ引換申出候ヘハ正銀百目相渡申候右ハ正金銭とも同様貨数何程ニても割合右ニ准ス　此金銀々札出入ニ百目ニ付

一壱匁と貳匁の歩銀ヲ壱歩延貳歩延と申候貳歩延の内壱歩ヲ益銀と致新銀札製し方其外札會所一巻ニ諸雑費ニ宛申候尤貳歩延の分後年壱歩半延ニ相改其中五厘ヲ右益銀と相定申候

一貢米銀納の分其外雑税町郷中へ貸銀返納何ヨよらし総して下より相納候金銀ハ悉皆銀

札ヲ以テ相納を申候正金銀のミ所持の者ハ於
札會所銀札ニ引換候上夫々の役所へ相納を
申候

一引換の義正金銀々札交換ハ勿論ニ候へ共諸
役所よりの引換ニ立用或ハ慥なり証書等を
以暫時金銀々札と見置候様申立或ハ歩銀用
捨等の義如何様無餘義筋申立候とも於札會
所ハ決して承届申間敷假令當主直の用向の
旨申立候と雖承届候ハヽ役人の越度たるへく

き旨嚴重ニ申付候

一通用中破を損し或ハ水火ニ逢候て損候銀札
其形分明ニ候へハ於札會所新札ニ引換申候
尤拾文目以上の大札壹枚ニ付銭四文小札壹
枚ニ付同貳文宛添指出と取納申候

一拾文目以上の大札ハ裏ニ印の餘白有之候所
へ世上取遣の目印として銘々小印を押し或
ハ文字一字書入候義見免し申候此義贋札の防きニ相成
別して民間の勝手ニ相成申候よし

一 右銀札通用申付候主意ハ打續勝手向逼迫ニ
付重々倹約申付無理なり繰合せも致させ候へ
共何分其効無之追々他借銀相増當座の凌方
ニも行當り必至の困難ニ御座候處去ル享保
年間より諸國とも段々領内限銀札通用相始
り近國領々ニも年来銀札相行ハれ居申候間
甚相好ミ不申義ニハ候へ共右趣法相立候者
必定一時の急せ凌可申尤仕方宜く候ハヽ永
年勝手向融通の都合ニも相成候義と両三年

以来勘定奉行平尾弥一郎と申者様々工夫仕
候處銀札通用の義ハ右の通近例數多有之子
細も有之間敷候へ共最初の仕向け方ニ寄人
心相帰し不申間もなく不通用ニ相成又ハ追
追不人氣ニ相成終ニハ正金銀と價位懸隔い
たし是の為上下とも大なり疲弊ニ相成候義
も有之全躰銀札通用致候へハ現在の正金銀
凡三倍程の働ハ屹度可相成事ニ付通用銀札
の三ヶ一程ハ引換元金銀ハ丈夫ニ相備置如

何様の義有之候ても取缺不申義勿論ニて此段ハ何れとも存知の前ニ候へ共只管今日の急ニ迫り無餘義右引換元金取缺或ハ急迫の餘り引換元ニ對し候てハ過分の空札繰出し候等の訳ニて漸々引換相滯候より不通用ニ成行後ニハ銀札の位ヲ落し候義何方も一轍の義ニ付最初の仕向ニ寄人心帰向の義ハ所々の宜しキ仕方ニ相倣ひ下民へ信義ヲ失ひ不申候ハヽ相済可申義ニ候へ共右の通遍

迫の勝手向ニ付引換元の正金銀一應ハ相備置候とも無程不得已義ニて取缺候様可相成ハ眼前の義其上空札繰出しの義も必無之共難申左候てハ下民へ信義ヲ失ひ候最第一ニて終ニハ銀札不通用上下大疲弊ニ可立至基ニ付此義ニ甚苦辛仕様々評議ヲ尽し漸く引換元金銀丈夫ニ相備決して取缺候義不相成元少分の義ニても空札出し候義不相成仕方相立通用相始銀札仕立方金銀出入ハ一々目

付の者立合見届ヶ受諸事嚴密ニ取扱引換方
聊指支無之候ニ付通用始りより人心帰向致
年々通用高相増大ニ勝手向融通の助と相成
漸々近傍四五ヶ國ニても高松札ハ無滞通用
致天明寛政の頃ニ至候てハ銀札壱匁ニ銭百
文通用定の處下々方ニてハ自國他國共ニ銭百
五六文ニ取遣致正金銀も右ニ准し他ニ例も
無之義の由是ハ其頃迄上方近國ハ多分正銀
通用ニて目方重く嵩高故行旅の商人等勝手

悪く御座候處高松銀札ハ晝夜共聊無滞引換
相成其品軽便ニ御座候ヶ以て正銀銭と見な
し他國商人とも取引ニ相好持帰候故の義ニ
御座候よし申傳候

○寶暦八年戊寅七月朔日家老西尾縫殿へ勝手
方用向引受申付候去今年臨時の入用方指湊其
上品々手遣ひの義も有之自他借銀弥増今年冬
ニ至候てハ必至の逼迫と相成例年秋収納米の
内六千石万一の節の用意として除け置家老共

連印の封仕置候義往古より之仕方ニ御座候處
右の除け米仕候てハ来春の差配方不相成候ニ
付家老共多用ニ取紛右封印付を候義失念の振
ニて此年計右除け米不仕候由今年迄ニ江戸上
方自國ニての借用金銀合て金五拾万両餘ニ相
成年々之利金銀拂方計も數万両ニ及候義ニ御坐
候
○寶暦九年己卯正月十五日西尾縫殿義昨年以
来勝手向引受候處元来極難渋の配り方ニて諸
事跡引ニ相成如何とも仕方無之此躰ニてハ當
年參勤入用の手當も相整兼候程の仕合ニ有之
ケ様の勝手向一人ニて引受居候てハ為不宜候
間引受の義ハ用捨致呉候様去冬以来度々願申
出無餘義趣ニ相聞候ニ付願ニ任せ引受指免申
候同月廿日再縫殿ヘ勝手用向の義為成存用捨
相願候趣尤ニ相聞候間願の趣意相立一旦引受
指免候ヘ共至て難渋の勝手向ニ付新ニ餘人ヘ
申付候義ハ安心不相成其方義ハ去年引受申付

候以来出精相勤世帯の底迄も能存居候間推て
又々引受申付候難渋の配り方ハ委く存知の事
ニ候間何分ニも根ニ入無遠慮取計可申旨申付
候縫殿申立ニ付奉行山下太兵衛義も勝手方引受申付此後家老奉行とも勝手引受の者一人つゝ連綿仕候
右同日奉行勘定奉行吟味役の者共呼出
直ニ申聞候大意左の通
勝手向段々指支ニ付去年以来縫殿へ引受申付
蹈込配り付き候處全躰是迄指閊候世帯向ニ付
兎角難及了簡趣ニ以去冬も断申出候へ共難渋
の歩ニハ存知の事ニ付断申出候趣ハ尤ニ候へ
共今更何れへ申付候いつくも同様の義ニ付此以
後ハ万々相談成も致如何様ニも倹約可致候間
何分引受根ニ入相勤候様申付有之候處早春よ
り猶又願申出一人引受罷在候てハ為なりかたく
義有之よしニて強て断申出候趣無據相聞先願
ニ任を一旦指免候へ共一躰至極難渋の歩ニニ
候へハ輙く可及了簡とも不被存候然れ共縫殿
去年以来出精致世帯の底迄も能呑込居候義ニ

付格別の存寄ヲ以猶又今日再引受申付候ニ付
弥何れも別て實義ヲ以為ニ可成義ハ無遠慮縫
殿へ可申聞候諸役人共へも申聞兎角歩ミ相立候
様可仕候縫殿達て断申出候訳ハ曽て不承候へ
共何分一了簡ニて不為の由申出候ヲ尤と存願
ニ任せ候へ共其内去暮家中へ救米遣し候義ハ
兼て積りニ相立居申候義ニ付旧臘初より申渡
の義縫殿伸満よりも申聞此方よりも催促致候
處手當違有之候由ニて段々及延引押詰漸と渡

方も致候由右躰の手當違ひ候程の歩ミニてハ行
行叅勤帰國其外公務筋の義ニ付間違出来可申
程も難計旁一存ニてハ難相計義と心得達て断
申出候義歟とハ相察候ケ様の義ハ何れも取計
手當違無之様ニ而可仕事と存候入部以来年々
不足の義ハ承候へ共是迄兎哉角振替ハ相成候
義ニ付去年とても右同様の義と存居候處縫殿
引受委く歩ミの訳ヲ糺し候處是迄の義とも違
ひ借銀ハ年々相重り前後振替の方便も無之一

向少ミ難相立段申出勿論縫殿義も断り申出候
程の事ニ成行候然る時ハ参勤帰國の手當も遣
ひ公邊向勤の義も指支候様相成候てハ至極大
事の義ニ付甚當惑致候右躰の指支ニ及候事ニ
候ハヽ前方より人々氣付存寄等の義共も申出
合黙も致候ハヽ今程の事迄ニハ及き不申義と
存候處只今迄何れも指より氣付存寄の義申出
候事も無之去年以来縫殿委く申聞候ニて承り
甚當惑致皆の者共油断ニ思候都て物入の義最

初ニ委く申聞候ハヽ差略の存寄共申聞猶又指
図共も可致義ニ候處是迄ハ物入の義後ニ成承
候義も數ケ條相覚候ケ様の義ハ何れも等閑成
心得故と思候然れ共是迄の義ハ其通ニて叱り
候訳ニても無之候右の通又々縫殿へ引受申付候
へ共何れも渠へまかれ万事指図共受取計候と
計相心得候てハ縫殿も難勤可有之候人々存寄
の義共以縫殿不氣付の義共も申達面々踏込相
勤候様可仕候縫殿より無理非法の義申聞候て

し引受ゟ事ニ候へハ人々所存ニ不叶義成とも其
通指図ニ任せ相計ひ候心得ニて却て為なら
さる事ニ候間随分實義成以たし縫殿指図たり
とも為ならさる義ハ押返し申達品ニ寄側用
達共成以我等へ申聞候ハゝ指図も可致程ニ存
候都て諸家とても家々ゟ仕来有之其振成第一
ニ立候故勘畧の義ハ次ニ成候義有之様ニ聞及
候當家風も右同様の振ニて別て諸役所向の義
右の心持有之様ニ承り候世帯の歩ミゆるかせの

なる時節ニハ懐廣く仕候義尤ニ候へ共近年の
歩ミニてハ懐の義迄委く相糺渕底打明し兎角
歩ミ相立候様可仕義ニ候處能き時節の振合成
諸役所向の立ニいたし懐の義ハ押包罷在候勤
方ハ甚ゆるかせなる義ニ思候尤只今迄とても
さして油断と申義ハ無之様相聞候へ共兵庫引
受以来人々存寄等ハ不申出頭取の存寄ニ随ひ
相勤候様ニ思候左様の心持ハ一己の勤方と申
すへくハ無之候

一小納戸并膳向等の義ハ是迄も段々差略の義申付候猶此上何分ニも指図可致存寄ニ候

一能或ハ鷹野等の入目ハ一度何程と申積り無て存知の事ニ付是程の物入ニ相成候と申義考候て段々差略致候へ共諸役所向端々の義ハ曾て存さる事ニ候へハ此方の存寄届候様申付方の了簡も無之候此義ハ奉行共初勘定奉行共吟味共随分心掛付帰服致候様ニ可申聞候猶又諸役人氣付存寄等の義も吟味共より側用達迄申聞候ハヽ承可申候都て端々の者迄も為筋の義万々無遠慮申出候様相成候ヘハ安心も致候事ニ付此段能々行届候様可申聞候

一都て手元の義慰事等ニ付ても物入の義勘辨仕前廉ニ其訳可申聞候ならへハヶ様致候へハ物入多く又ヶ様致候へハ入目減し候と申訳委く可申聞候其上ニて無用ニ致候義も有之又無據難止義ハ差略の義時々可申付候

一末々の者へも右の存寄行届候様申聞度事ニ
候へ共諸役所端々の義ハ存も無之勿論算數
等も不案内の事ニ候間端々迄の指圖等ハ届
不申候右躰の義ハ奉行共勘定奉行共吟味共
能く存知の事ニ候間根ニ入申間人々一分の氣付存寄等
為ニ可成義ハ無用捨申出候様可為仕候

一諸役人共其役所向き不向きの者も可有之候
左様の者ハ又勤方替り候場所相應の役所へ
振替候ハヽ文夫ニ相勤候様の義も可有之候

ケ様の義ハ何れも無遠慮可申出候
右の通の存寄ニ候猶細りニ申聞度候へ共一
躰万事取ゟ兎歩ミ立直候義第一の事ニ候
へハ兎角人々の威儀抔打捨實義第一ニ仕随
ひ万々取ゟ兎如何躰ニも致し世帶の配相
立候様仕候義肝要の事ニ候如何様の存寄申
出候とも叱りハ不致了簡致候上可申付候全
躰ケ程の指支ニ及何の了簡も届不申様ニ成
行候迄左程の氣付存寄も不申出義ハ役人共

何れも等閑なり心持故と存候へ共甞て叱り
候義ニハ無之畢竟我等不才故と存甚残念ニ
存當惑致候事ニ候間右の趣篤と勘辨仕踏込
相勤可申候

右の通申渡縫殿へハ諸役所倹約申付候ても目
當無之候事ハ年ヶ経候程心持相弛候義ニ付二
代頼常代元禄年中相定候定法の通取計可申旨
申付候猶又縫殿願申出候ハ御世帯御取直しニ
相成候迄の内格別無據と有之被仰出思召と有
之被仰出御加増御褒美被下方右三ヶ條御断申
上候趣ニて則願の通承届申候然ルニ其年茶道
坊主の内一人數十年無懈怠相勤候者有之候ニ
付右の者茶道小頭格ニ申付一人扶持ニ切米壱
石加増遣申度段家老共へ申聞候處此時節故先
延引いたし追て勝手向取直し候上の事ニ仕度
段縫殿申聞尤の義ニ候へとも右茶道義ハ三代
頼豊部屋住の節外一人と一同小僧ニ召抱候者
ニ候處右外一人ハ頼豊心ニ叶側向ニ召遣追々

取立後ヨハ重役ニ申付高禄迄も遣候ヨ右の茶
道ハ今以僅貳人扶持ニ切米拾石遣し有之其身
實躰ニて三代の間數十年側向無懈怠相勤候時
節直り候上加増遣候義ハ尤ニ候へ共最早七十
餘歳ニて餘命も無之者故何卒存命の内加増遣
し度候間猶又了簡致候様申聞候處縫殿答ニ誠
ニ以難有思召乍憚御尤至極ニ奉存候然ル處ケ
様の義兼て相願御聞届被下候格別無據と申ヨ
相當り可申候間何分此度ハ御受難申上旨申聞

承届申候依之此後暫の間加増遣し方一円相止
ヽ申候又参勤の節道中供仕候家老へハ出船前
紋付羽織遣候義古来定例ニて則道中着用も仕
候義ニ付時節柄とハ申なから無用ニても難相成
と此年参勤前供仕候家老木村亘へ右羽織遣候
筈ニ相成候處亘願申出候ハ當御時節中ニ被下
物の段ニてハ無御坐候御参勤の御手當さへ相
整兼候御時節ニ御坐候間何分被下方御免被下
候様申出右遣方無用ニ相成此後暫の間祝儀褒

美等の遣し方一円相止申候又寶暦十一年頃頼
恭家老筆頭肥田半兵衛へ申聞候ハ此程誠ニ不
得已入用の事件十ヶ條を以縫殿へ申付候處追
て同役共評議の上其中五ヶ條ハ心ニ任せ可申
今五ヶ條ハいかにも叶申間敷由申なり勝手向
今以指支の事ハ我能く存知の所なり渠ハ申旨ニ付
て止め可申程の義ニ候ハゝ初より申出すへき
ニ何しす況其事何れも細事ニて其方共評議の
上諫争可致程の事とも思われす其方ニハ如何

存候哉と申聞候處半兵衛少時思案の躰ニて只
今仰の趣ニ御坐候へハ縫殿より御受申上候義
最初ニ同役共と評議し候所とハ少し相違仕候
渠ハ御勝手向引受居候得ハ其事ニ付思召を伺
又ハ言上の事とも多く自然度々御前へ罷出又
御親く被仰下候處も他の同役共よりハ格別ニ
御坐候へハ御前ニ罷出候ニ及候てハ心の外な
る事をも申上候事と奉存候と申候頼恭成程左
様の事も可有之最初同役共と評議し候所ハ定

て斯迄甚敷義ニ而ハ有之間敷と存候故ニ其方
ニ所存状も相尋候なりと申候へハ半兵衛重て
初ニ縫殿ゟ同役共と評議し候ハ十ヶ條の内三
ヶ條ハ思召ニ随可申今七ヶ條ハ兎も角も御延
引相願可申との儀ニ而何れも同意ニ一決仕候
義ニ御坐候御勝手御配方の御目途も少々相立
候とハ申なから誠ニ御大事の場合ニ而聊も御
心弛御坐候ハヽ大なる御手戻りニ相成可申候
間右の件々何れも小事ニハ御坐候へ共只今ニ

てハ軽忽ニ思召間敷御事ニ候と申候へハ頼恭
少しも不興ニ相見候へ共後ニハ家老共一致ニ為
状存尽力仕候義状深く感賞仕候由ニ御坐候
一右縫殿義ハ剛毅の性質ニ而勝手向引受以来
倹約取行ひ方金米出入の制度甚厳密ニ御坐
候故初の程ハ譏言頻ニ流行仕候ニ付目付役
の者共世上誹謗の事とも書取候て頼恭手元へ
指出候へハ度毎其書状容ニ縫殿へ遣し尤我
等ニ於て如在無之ものなりと有之直書状添

申候由又縫殿嫡子登頼恭近習相勤候處同勤の者共世評の趣を以頻ニ縫殿を誹謗致時々ハ頼恭前ニても誹謗仕候處其節ハ頼恭も同様ニ申候て猶世評の趣をも相尋候ニ付定て無程縫殿義ハ退職申付候ニて可有之と何れも申合登義も日々承候ニ堪兼居申候由の處或日頼恭栗林の別莊へ参追付参事ニて人一人呼寄候間用意致候様近習の者へ申付日しけ候て急使ニて縫殿を呼寄申候此程の様子も有之候ニ今日一人呼寄候ハ定て宜き事ニハ有之間敷如何哉なと猶近習の者共申合候ニ縫殿参候へハ手ずから茶を點し遣し料理なと念頃ニ申付扱近習の者共を遠く退け候て深夜ニ及ひ候迄閑談致し退出の節ハ妻子共へ遣可申旨ニて手廻りの品々を遣し無残所懇意ニ取扱ニ御坐候ニ付近習の者共も恥入此後縫殿ゟ事申出し候者も無之追々傳承候て世上の譏言も相止ミ申候由

一縫殿義奉行并始諸役人へ指図仕倹約取行ひ申候大要ハ元禄中相定候年中收納米銀并以出方配り合候定法并手本ニいたし當時ノ定法相立猶其中ニ而精々減省致毎事定法より内端ニ而相済候分ハ大小ニ不拘其餘銀并別物ニ致置并定法ニ相立有之ケ條ノ内以来出方相止候義有之候も品ニ寄引續年々出方有之候とも見なし其銀并も別物ニいたし又定法ノ外臨ノ出方有之節ハ兼て前例等見合き時

節相當随分減略ノ積り并相立置其中ニ而も猶又色々省略いたし餘銀有之候ハヽ是又別物ニ致其餘聊ニ而も定法外ノ益銀米有之候者悉く右別物と一と結ニいたし勘定奉行ノ内両人引受支配致精々増殖方取扱右別物并以第一ニ自國他國借銀返辨方ノ指配仕せ候尤莫大ノ銀高ニ有之候間中々容易ニ返済可相成様も無之候へ共夫々示談ノ上年々元利渡し方相違無之程ノ規定相立其上ハ軍用手當

相備且又頼恭義兼て三年の蓄なきハ國其國
ニあらすと申古訓を服膺仕水旱等の災有之
候とも國民饑餓ニ及を不申手當十分相整置
申度深慮有之候ニ付右貯金をも仕置申度倹
約無懈怠取行候義ハ不及申別物増殖の義も
無油断取扱申候右の仕方ニ付てハ勝手繰合
甚手狭ニ相成聊り振替も相成不申候ニ付頼
恭手元遣用金年々省畧仕遣残の分側用達共
へ支配仕を御坐候金銀をも繰合融通の為縫

殿へ委任仕候尤右等の方向聢と相立兼候内
翌寶暦十年庚辰の春幕府御轉任ニ付京都へ
の御使兼て井伊掃部頭へ被仰付有之候處其
期ニ至父大監物死去忌服有之ニ付右代り御
使頼恭へ被仰付急ニ上京仕候間不意ニ莫大
の物入有之又々借銀も相増候へ共前顕の通
指配方宜手元を始役人共倹約相怠り不申候
ニ付追々順相立是より六年目明和元年ニハ
家中知行物成年来借り上候内一ツ通戻し遣

しかれより七年目明和七年ニ至り無々申付
候軍用并國民撫育手當十分の積り金高の半
数相備り其翌明和八年頼恭死去仕候へ共頼
真頼起其遺志成継怠慢なく差配仕を寶暦九
年より廿六年目天明四年甲辰ニ至頼恭存意
の通貯金相備り申候

一右の通非常の倹約申付候ニ付頼恭手の省畧
自身ニ申付候義左の通

一妾腹の子供大勢御坐候處江戸にて出生候幼
年の分ハ男女とも悉く家中の子供の振にて
高松へ引越を栗林別荘にて男女相分け各一
と部屋ニ住居致を賄料ハ夫々ニ宛行候へ共
日々の養育方ハ一と結ニ致を精々倹約仕を
右賄料の内有餘有之候ハ蓄置を後年片付の
節入費の多足ニ仕を候

一寶暦九年参勤の節より道中行列ニ鷹居させ
候義相止申候是ハ大猷院殿より御免許にて
元祖頼重以来道中筋何れの領地ニ擒なく鷹

遣ひ来り尾紀水三家の外例無之義ニて代々
眉目ニ仕候へ共鷹師餌指等も召連彼是失費
有之無益の義ニ付相止申候 但帰國道中ハ御暇の節御鷹拜領
も有之候ニ付道中行列ニ鷹居させ時々遣方も有之候

一右同年より参勤帰國の節跡立ニ女とも召連
候義相止申候

一平日の膳部一汁一菜都て菜廻り代り無と申
付候

一領中東西南五六里以外の地へ放鷹川狩等ニ
罷越候節其方角の民家寺院等ニて一二夜宛
止宿仕候義前々より於仕成ニ御坐候處右倹
約ニ付止宿の義ハ一切相止遠方へハ暁出立
乗馬ニて罷越夜ニ入罷帰或ハ船便利の地ハ
釣船ニて罷越申候

一在江戸の節一門縁者ハ勿論諸大名懇意の人
ニ出會多端ニ御坐候處右倹約後ハ上屋敷の
庭ニ有之候茶屋へ軽き勝手抔出来大火鉢抔
居へ候て庖丁人一人罷出割烹致し近習の者

手傳候て至て軽き料理仕立さ一门縁者ハ不
及申同席酒井雅楽頭井伊掃部頭老中松平右
近将監等いつれも此所ニて饗應仕格立候義の
外表奥とも座敷向の饗應ハ成たけ不仕候右
の通ニ付平日庭掃除草木手入垣結直し迄も
近習の者共相手ニいたし自身ニ仕候由

一衣服の地合右倹約後ハ大ニ位下け申付候處
或時登城の節着用の黒小袖より綿共吸出し
見苦敷候間取捨可申と致候へハ却て大ニ吸
出し候餘人の衣服ニハ不相見候間以後ハ綿
の出さる程ニ取計可申旨小納戸役の者へ申
付候程の義ニ有之候由

右の外瑣細ニ義迄深く心共付倹約仕候故家来
末々迄一致ニ相成出精仕候間右の通無程順付
候て追々勝手立直り申候趣ニ御座候

○小民共冤獄も可有之哉と不便ニ存寳暦九年
己卯三月四日此後毎月四日十四日廿四日朝六
ツ時より暮六ツ時迄訴状箱在國中ハ城の東门

外腰懸へ出し留守中ハ家老始諸役人相詰候會
所門前へ指出候様申付後ニ夜ニ入人目抔忍候
者も可有之との義ニて夜五ツ半時迄差出き申
候右訴状ハ悉く自身披見いたし手元ニ留置品
ニ寄家老共へ相渡詮義致さ申候在江戸留守ニ
ハ訴状江戸へ相廻し披見ニ入レ申候依之役人
共私抔存る者ハ甚恐レ慎申候由右訴状箱の上
ニ札二枚掛さ申候左の通
一毎月四日十四日廿四日朝六ツ時より目安
箱出し置候間直訴仕度者ハ書付右の箱へ
入さ可申候外々へ張文等致候ても取上無
之候間其趣相心得可申候
一御仕置筋の義ニ付御為ニ可相成品の事
一諸役人非分の取計并私曲有之事
一支配の役所へ致訴訟候時不遂詮義永々裁
許無之再三願候ても捨置候分可直訴事
右一枚
一自分の勝手より義私の意恨抔以悪事申間

敷事

一訴訟の義其筋の役所へ未申出内或ハ裁許
不相濟内申出間敷事

一総て有躰ニ不申事ニ取結候義共慥ニ不存
風説等申間敷事

右の類ハ取上ケ〻書付ハ焼捨ニ可致〻尤巧
の品ニ寄罪科ニ及ひ〻書物堅く封〻持来へ
〻名所無之ハ是又取上間敷事

右一枚

右訴狀箱の中へ匿名の書ニ入候者有之左の通

鄒忌修八尺有餘而形貌美麗朝服衣冠窺鏡
謂其妻曰我孰與城北徐公美其妻曰君美甚
徐公何能及君也城北徐公齊國之美麗者也
忌不自信而復問其妾曰吾孰與徐公美妾曰
徐公何能及君也旦日客從外來與坐談問之
吾與徐公孰美客曰徐公不若君之美也明日
徐公來孰視之自以為不如窺鏡而自視又弗
如遠甚暮寢而思之曰吾妻之美我者私我也

妾之美我者畏我也客之美我者欲有求於我也於是入朝見威王曰臣誠知不如徐公美臣之妻私臣臣之妾畏臣臣之客欲有求於臣皆以美於徐公今齊地方千里百二十城宮婦左右莫不私王朝廷之臣莫不畏王四境之內莫不有求於王由此觀之王之蔽甚矣王曰善乃下令群臣吏民能面刺寡人過者受上賞上書諫寡人者受中賞能謗議於市朝聞寡人之耳者受下賞令初下群臣進諫門庭如市數月之後時々而間進期年之後雖欲言無可進者燕趙韓魏聞之皆朝於齊此所謂戰勝於朝廷人若不自知鄒子之不如徐公美鄒子自知之故人言不能蔽也凡說客之言其文雖可觀多盜賊之計而讀之使人胸中織惡唯此一策天下之至言泥中之美玉也若威王可謂能用言矣非賢而能然乎我公不待鄒忌既立謗木賢於威王遠甚其諫行言聽也可知矣傳曰禹湯罪己其興也勃焉桀紂罪人其亡也忽焉我公引過自歸其興而有後也可知矣

国立公文書館 National Archives of Japan

詩曰弗躬弗親庶民弗信我公躬親之其施政
公平也可知矣又曰靡不有初鮮克有終不啻
唐明皇凡少壯之君皆然且五十而改者於我
公見之矣其終始惟一乃日新也可知矣於是
百姓舉欣々然有喜色相告曰吾公庶幾無疾
病與何以能躬親也 某聞之不勝喜應募敢以
聞奉賀盛德誠惶誠恐頓首再拜謹言
寶曆九年己卯夏五月十四日
西郡草莽臣秦 某 謹上

○寶暦十二年壬午九月勘定奉行共役所ニ於て
諸拂明細帳と申帳面ヲ年々編纂致させ申候是ハ
年中諸役所ニおいて銀米拂方巨細とあらはし門部ヲ分
ちて詳記いたし後年の目途と致させ申候右帳面
ニ頼恭自筆ニて序文致遣候左の通
吾嘗て聞り孝經ニハ節ヲ制し度ヲ謹ヲ以
諸侯の孝とし論語ニハ奢らんよりハ寧倹
せよといふヲ礼の本と説給へりと然る時
ハ財用ヲ謹て倹約ヲ本とせることこそ聖賢の

教なり謹ておもひみるに先君英公仁賢の
御性質豪邁の御氣象を以基業を草創し給
ひ士民欣ひ戴き都鄙饒に贍へり節公にハ
文武の御才徳有て上を敬ひ下を愛し御身
を倹にして下民を優にし給ひし一國の内
上下質撲にして不足の事なかりしかられに
よりて元禄年中の御政令を後世の手本と
なるされなり恵公ハ慈良の御心ゆへ臣下
懐服せるといへとも御不幸にして天災流

行し水旱頻にいたり用度御不足故に群臣
を御憐ミ民庶を御救の思召ハ有なから思
召のまゝになりかたきことも多かりしか懐
公にハ御聡明にして元禄の政に復さんと欲
給ふの思召なりしに御早世ありて御志も立さ
ることを悲へり此事共なり余か如き何の才徳
もなきに唯同姓の親族たるを以あやまりさ
るに此家を相續し過分の事此上もなき事
なり然るに余生れてより東都に成長して

此國の風俗をも心得ず我れ等ミなし不學無術にして家を齊へ國を治るの要道をも志らず唯徒に一國人民の上に居ること殆二十年に及ひぬ費用日々に多くして用度愈不足に及へり已むことを得ずして群臣の俸祿を借り年中の儀式なども行ハず文道なども捨置武備をも講ぜずして暮しぬれども用度益不足して目前の急さへ防ぎかねそれにより本國他國の商賈より金銀を借債して年をおくりぬきつるにより元利年々に増長して臣下の扶助さへなりかねる程になりゆきぬ幸に凶年饑饉なかりつるにかくの如くなれハもし水旱蝗虫等の患ある時ハ何を以て年を終ふべきや一とつとして此事を思ふことに慚愧の汗胸背を濕しぬ寶暦己卯の春老臣西尾縫殿忠顕に命して國用を總括り諸役所の用度を減さしむ忠顕力を盡し思を焦し身を忘れて國に報ひ余不

才なりといへとも衣服飲食より器物翫好に至るまて自の身に奉する所のものハ耳目の及ふかきりハ尽く減損を加へ減して又減し今年壬午に至て往の日に比ふれハ餘程の違ひなるやうに覚ふ忠顕勘定奉行に命して諸役所の用度を計り巨細悉く記し編て一書となし号て諸拂明細帳と云勘定奉行等此帳面を以て定法となし若格別の品ありて用度あれハ新規の事となし後々の法式とする事を許されんハ數年の後にハ借債ある所も消除して元禄の政にも復し群臣の俸禄をも還し年中の儀式をも執行ひ文道をも修め武備をも励ミやうに成へきなり忠顕か功勲ありと云へし然りと雖も倹約甚過る時ハ功ある人に恩賞を與ふることもなくさし置て罪ある人にも刑罰を行ふやうにあることあり功を賞せすして罪を罰する時ハ臣子心を離る懶惰にして

勤を励ることなく唯私欲を逞ふするのみ
心になりゆくなれはさらぬさへなりし黠
智貪汚の役人なとハ小民の告訴る所なと糺
者を侵し屈て己か功を立んとする者あり
臣子心を離る小民怨ミ嗟く時ハ瓦解土崩
の勢ひとなれハ色しになりて或ハ烏合蜂起と
なり一揆なと起すことも有て國家をも顛す事
あるなれハ戒め懼るゝ所ことに甚きに有
られや大小の役人能々此義を勘辨して丸

の事下を恤を以て第一とせんことあれ予
か至願也

寶暦十二年壬午九月　中将朱印

寶暦八寅年以来今年迄五ヶ年か御世帯
方諸拂明細帳改正成就入御覧候處去ル
朔日堀多仲を以御直筆の御序文御出し
被遊篤と拝見仕明細帳ニ添置可申候尤
役人共且又横目共へも拝見為仕可申旨
被仰出候ニ付今日御政務懸りの面々ハ

於年寄部屋拜見し御用人御船奉町奉行
横目郡奉行勘定奉行吟味人於奉行部屋
拜見為仕候此旨謹て無怠可相守者也

寶暦十二壬午年十一月八日

西尾縫殿

○寶暦十三年癸未五月九日近習目付の者へ自
筆ヲ以左の通申聞候

總て出會振舞の義輕き茶漬ニして寄合可然段ハ
先達て申付候依之近頃餘程質素ニ向候様ニ聞
及候然ル時國風ニして前酒ヲ指出或ハ吸物其外
種々肴ヲ以饗應有之様ニ相聞候然ハ一定の膳部
質素ヲ用ひ候共全虚名の事ニして甚不宜致来ニ
候向後ハ前酒用捨可有之事ニ候然れ共前酒法
度と申義ニハ無之候へハ前酒好候族ハ勝手次
第給候とも其節肴等取計ハ堅無用ニ候其侭本
膳ヲ指出可然事ニ候諸事風俗の義ハ一時ニ相
止候物ニハ無之候へ共近習の面々より相直り
候へハ家中ハ不及申郷中町ともニ押移り可申

候其方共ハ役義の者ニ候へハ向後堅く相守前酒ニ而取締ケ間敷義無用ニ可仕候折々茶會ニて彼是召寄候義振舞の仕方も見き置候道の心得ニ而も相成可申哉ニ候其方共始其ヨうちも無く只慰一と通りの事ニ相心得候義と思候若心得違の者も有之候ハヽ其方共より態々申聞候様可致候

○右同年七月晦日近習の者共へ自筆ヲ以左の通申聞表向の者共へも寄々相傳候様ニと申聞候

音物取遣の義ハ兼て定も有之候故入々相心得罷在候へ共當時の成行ハ心得違も有之候哉重き祝儀等の節ハ時節柄ヲ申立肴代十疋の贈答も不致此段ハ時節ニ應し尤ニも候へ共内々ニてハ時節の見廻不時の音物色々品ヲ付到来物と申なし軽うちき品ニても致取遣候族も相聞候嘸一同左様ハ有之間敷候へ共不勝手なる者共ハ先方より音物ニ預り候へハ迷惑なからも

相應ニ返礼も心懸申義ニ可有之候誠ニ到来物
手作の品或ハ獵魚なと軽く贈り申義ハ内々左
様も可有之事ニ候親類縁者等の取遣ハ格別役
人共へハ嘸有之間敷事と思候へ共不圖音信等
有之時ハ小役人なり共殊の外迷惑致候事ニ候
間此以後心得違無之此趣意篤と相考表裏無之
様ニ可致候

賴恭義家中初領中風俗等ニ付所存ニ叶不
申義數々有之候へ共元来遠慮深き性質の
上他家より相續仕且ハ先々代以来の不勝
手ニて不得已永々家中知行物成借上け領
中用銀借銀等も度々申付候中故彼是斟酌
仕存意十分ニ申出し兼年来身分の行事勉
励仕何事ニよらす自然と下々見聞及候て
相倣ひ候様仕成候趣ニ御坐候前條の前酒
と申義も國風ニて最初ニ吸物酒肴數種差
出し酒宴長し候故夜ニ入本膳差出候様相
成候間何れも給酔候て料理ハ何様ニ有之

候哉覚不申程の義ニて甚不宜風俗の趣又
本文音物贈答の義も時ニ不相應猥なる様子
ともたしかに承届候へ共夫々咎をも不申
付全く近習の者共へ教諭ましまさす甚寛和
なる仕方ニ有之候へ共右の趣意早速端し
近も行届身ニ覚有之候者共ハ深く恐縮且
ハ恥入候て右の風習此と相改り申候よし
申傳候

○寶暦中年月日不詳 重臣共へ直ニ申聞候大意

総して政事ハ賞罰を明ニ致候事と承及候賞罰
明とハ善を善とし悪を悪とし勤の閑劇家の新
古人の精不精才不才行跡の善悪勤の虚實功の
立と不立と是等を見分け其上ニて善を賞し候
て身分を取立加増を申付或ハ褒美し悪を罰し
候て役義を貶し知行を減し其餘軽重咎をも可
致事と我等ハ存候然るに愛私の親疎好悪愛憎と
て氣ニ入候人ハ種々取なし其器量も無之者を
申立候て役替加増等を申付自分氣ニ不入ときく

悪ヲ遠ケ功ヲ抑ヘ種々罪ヲ申立器量有之者ハ却テ相沈候様ニ致候ハ賞罰無之國ト承及候總シテ人々才徳格別ノ者ハ多クハ有之間敷候ヘ共陰陽無之實貞ニ相勤身持悪敷事モ無之ヲ徳ノ類共可申候何ノ勤ヲ申付候テモ相應致兼サル者ヲ才トモ可申候然レ共人ノ心ハ面ノ如シト申シ申候テ我心同様ノ者ハ無之并ニ人ニ長ト短ト有之候間只私ノ贔負ヲ離レ何事モ忠義ヲ以奉公致候者ヲ見出シ用ヒモ立候様ニ致候

事ヲ重役人頭立候者ノ勤ト存候得ヘハ自ラ賞罰モ立可申候人ノ辨口ニ欺カレ又ハ諛ニ羈サレ我意ヲ張才ヲ妬我黨ヲ立候者ハ重役人ニハ不致ニ此ト聞及候自分ノ愛シ候者ハ私ノ財寶ヲ分チ與ヘ申候ハ恵ミ候官禄ヲ以私ノ恩ヲ報シ又ハ恵ヲ施シ候ハ却テ不仁者ノ事ニ候假令主人ヨリ共官禄ヲ妄ニ無功ノ者ニ宛行罰ヲ無罪者ニ中テ候ヘハ國衰ヘ候事古今同様ノ事ニ候然ハ我等平生好悪ヲ以テ賞罰ヲ不行様ニ相慎

候へ共畢竟我等不明故時々間違の事も有之様
覚申候重役の者ハ主人の補佐ニ候間心を尽し
其不及所を相助候事専一に候
一我等家ハ國持大名の先祖勲功にて代々領し
来り又ハ御譜代衆の戦功器量にて共ニ天下
を泰平に被致御取立の衆中とハ隔別にて全
く御爪の端故如此莫大の領地をも被下其上
結構なる格式ニ被仰付諸大名中の上ニ立候ハ
冥加至極難有事に候間別して公儀をハ他よ

りも大切に存何卒重ね御奉公も有之節ハ万分
の一の御厚恩をも報し度事ニ候然るに人ニ
寄り簡無之輩ハケ様の義をも不辨只人柄自
満仕他ニ向ひ驕り高ぶり候事を是と心得公
儀御奉公をもそれ程大切に不存振ニ相見申
候是ハ國持大名御譜代衆ニ對し候てハ甚恥
敷事と存候剰冥加ニも恐入候事ニ存候随分此
ところを得心致候へハ万事心得違も大ニハ有
之間敷と存候准之家中の者共他家中の身命

ヲ棄候人々の力ニて其主ヲ封國の君ニ致候
とハ差別可有之事ニ候從なる治世ニても
ケ樣ニ百年ニ餘り國家ヲ治め持ち候ハ是又
主君一人の力ニ無之畢竟諸家中先祖共より
共ニ精力ヲ盡し候故の事ニ候へハ是も軍功
同樣の事ニ候へ共人ニ寄代々高祿ヲ食ミ指
たる功も無之人並々ニ相勤候者有之又ハ大
臣重役ニて跡々迄其功德ヲ殘し候者も有之
或ハ末々ニても相應ニ心力ヲ盡し國家の益

ニ相成候者又ハ藝能ニて身ヲ立候者も有之
候假令重役勤候ても指たる奉公筋も無之剣
國家の妨ニ相成候者も代々御宥免ヲ以相續
候者或ハ外戚筋等ニて家ヲ取立候者の子孫
なとハ家旧き程別て御代々御厚恩可有之事
ニ候然共故旧ヲ不忘とも申候へハ君たる
人舊家筋の者ハ隔別ニ存候事ニ候へ共人々
一概ニ家の舊たるニ不拘御代々の御宥免ヲ
も不顧世間の國持戦功の家中と同樣ニ存候

ハ甚恥敷事の様ニ存候右等の慶勘辨致人々
此以後目付慶或相改候様致度事ニ候

○
明和元年甲申八月朔日家中知行物成數年借
上け嚴敷倹約申付候ヘ共世帯の配り今以行届
不申下去借上け米の義ハ最初より重く苦労ニ
存候事ニ付先三ツ成の渡方ニ申付候尤相續き
三ツ成相渡候義難計候ニ付勤方等の義用捨致
候間諸事倹約可致旨申付候

一寶暦九年より此年ニ至七ケ年の間非常の倹
約取行ひ其間種々臨時不意の出方も多く御
坐候ヘ共彼是相凌自他の借銀追々返辨方の
配りも相立今年より少々宛有餘金貯置候様
相成申候

○
明和四年丁亥三月十日家老共或以家中の者
一左の通申渡を候
御家中の面々今以御借り米有之候ニ付勝手取
續の為諸勤御用捨ニ候ヘ共武備の心懸威儀作
法の義可取乱様無之其段ハ御借り米の有無ニ

不拘面々身持可相嗜事ニ候ヘ共心得違の者も
有之候ハヽ諸事御用捨の時節故不慎の義有之
候ても不苦様存我侭増長致本意を取失ひ候
ハヽ自然と御家中の風俗悪く罷成隣國の評判
も不宜候てハ上の御政道不行届と申もの故今
更改被仰出候ても不及候へ共重役の者共ハ別て
物事ニ氣を付適一類の妻子参會いたし又ハ町
ものれ等へ罷出氣延致候とても華美より遊興ハ
可有様も無之万事猥りかましき義無之様ニ致し

面々共ニ悴等其日帰りにて御領分沖合等へ殺生
ニ出候とても不都合の義無之様ニ相嗜侍の者へ
宜様ニと被思召候春向瀬居島へ遊猟ニ出候義
も其日戻りの筈ニ候然とも程近き場所にても
無之候ニ付風波の障りにて船繫等致候義ハ可有
事ニ候瀬居島ハ御免にて逗留不苦と申にてハ
無之候其外沖合ハ勿論海山何れにても御領分
へ其日帰りにて罷出候義ハ前々より御免ニ候へ
共一宿も不相成御作法の段ハ何れも存可罷在

候猶以心得違無之様可申聞旨被仰出候
右ハ家中永々の二ツ成ニて困窮の處去ル甲申年以来三ツ成ニ申付諸勤人持等ハ是迄の通用捨致遣し候ニ付漸暮し方心安く相成年若の者なとハ心得違酒宴遊興ニ耽り猥の振廻有之或ハ沖合へ釣殺生ニ罷出候振ニて大阪或ハ近國の湊々へ罷越遊興致候者も有之甚不埒なる義ニ候へ共元来右の意味も有之候事故先人別ニ咎ハ不申付本文の通一同へ申渡し候處文中我侭増長の四字ニハ貞實の者迄面目を失ひ右猥の風俗必至と相止申候由申傳候

○明和七年庚寅六月閏六月七月八月大旱領中ニて高五万弐千石餘の場所不残枯捨り三万石餘半作ニて稀なる凶作ニ付此年より翌辛卯の夏ニ至莫大の米銀救出し候て困窮の者共救遣申候此時頼恭近習の者共へ内話ニむかし節公二代頼常ニハ御貯金多く國民御救の事も思召の侭

なりしと承る我等ハさりけと貯金いたすにハいたし
祢と縫殿（西尾但去巳丸年病死致候）ゟ年来の苦労にてかこ
の如く手当金を備ぬれハたとへ年々旱魃して
今年の如くなりとも三年の間ハ下民を餓させ
ましと思ふなり是ハ大名の役なり身の奢の為
に貯金をするにいたしはと申聞候よし又窮民救方
の義多少両度に取調其中にて多き方に致遣を
御此節と奉行共より伺出候処熟覧の上随分此
通りにても宜かるへく候へ共今年ハ格別の年柄

に候数十年前の事なりや此度多きと申調より今
一段宜しき救方の例有之様ニ聞及候吟味致し
其通ニ可申付と申聞候ニ付吟味致候処成程二
代頼常代に右宜しき救方の例有之其通申付候
ケ様の事無て相心得居候義役人共不審ニ存候
より平常心を民事に用ひ候間役人共と用談の
節ハ勿論近習の者と夜話の中にても民間ニ係り
候事にハ別て心を留承り置候故ケ様の義も覚
居候事と相見候由

一寶暦九年大倹約申付候節西尾縫殿へ申付候
軍用并國民撫育手當貯金十分の積今年迄十
二年目ニて半數相備り申候
○明和八年辛卯七月十八日於江戸六十一歳ニ
て死去仕候頼恭在職三十三年公務恪勤藩治励
精始終一日の如く貽厥孫謀ニ至る觀るへき者ニ
御坐候哉以て當家中與の祖と仕候平常の行状
左の趣ニ御坐候
一毎日朝六ツ時目覚五ツ時表居間ニて髮月代

其節近習勤の者共目見申付五ツ半時過朝飯
八ツ時前夕飯夜五ツ時夜食其跡ニて軽き肴
一二種ニて酒相用ひ四ツ時過九ツ時迄ニ寝
所へ入申候當家相續以来三十三年の間一日
も相変候義無之候
一政務筋ニ付重臣共目見仕度由申候へハ晝夜
何時ニても即刻逢申候義ハ勿論ニ候へ共毎
月十ヶ日用日と申定置家老初重立候役人
共目見申付國政承申候四ツ半時より一時

餘或ハ二時餘も相懸り短日の節なとハ夕飯及遅延候事も時々有之是又在職中相怠り候義無之候

一参勤交替不違時と申ハ武家諸法度第一のケ條ニ有之候處當時の諸大名在江戸ヲ好ミ病氣等ヲ申立滞府或ハ國在所への出立の日限ヲ延引し又未た参勤の時節ニ至らさる前ニ色色の品ヲ申立不時ニ参勤する輩多分ニ有之候處頼恭義ハ一度も時日ヲ違へす参勤交替仕候總して武家諸法度の趣ヲ固く相守り居間の額ニ武家諸法度の書ヲ掲け平生省覧仕

仕（延享四年十月宝暦十三年九月参勤仕候是ハ延享二年宝暦十年京都への御使相勤候ニ付兼て公儀より御用捨ニて十月中参府と被仰出しり故なりられ又前後代々の例なり）

一溜間詰ハ幕府の勤向多端ニして毎月登営其外の勤方度々ニ御坐候處數十年の間一度も懈怠不仕登城の日ハ夜の内より支度致刻限ヲ相待申候總して溜間詰の勤方無残所鍛練仕候上逐一自身ニ筆記仕座右ニ指置申候右筆

記ハ井伊掃部頭初同席の面々懇望ニ而貸遣
候義も御坐候右の通老躰迄數十年皆勤致官
位席柄と申國政宜き趣其聞有之其上嫡子兵
部大輔義も永々頼恭同様恪勤仕候旁幕府の
思召入も格別ニ而三家國持初諸大名の信用
も不浅趣ニ御坐候當時諸大名早く隠居等致
若年の輩多く頼恭の如く
永々父子相勤候輩ハ
甚稀なる由ニ御坐候明和六年己丑老躰ニ而
數十年皆勤大将軍所々御參詣御先百度相勤
候ニ付以後御先立御用捨被下候間月次登城

隨意ニ致候様ニと老中より内達御坐候同八
年頼恭病中老中松平右近将監より家老共へ
讃岐守殿今度ハ大病ニ而快復ハ有之間敷由
承候席柄と申數十年参勤交替不違時無懈怠
恪勤被致國政も行届候事ニ而諸大名の手本
なる事ニ候處右の次第我等共ニ於ても一同
一入残念ニ存候旨申聞候

一勤向ニ付ての出行ハ勿論其外他行の節並参
勤帰國の道中ニ而も兼て支度致居供觸申付

候刻限ニ供の者共相揃候段申渡候へハ直様
出駕仕供の者少しも相待を不申候

一先々代以来不勝手ニ付相續後種々倹約等取
行き候へ共何分立直り不申寶暦六七年ニ至
候てハ必至ト逼迫ニ相成候ニ付深く辛労仕
候處儒臣中村彦三郎と申者夜話の序ニ御倹
約と申ハ御自身御取行不被成候てハ不成事
ニ候御自身御倹約御取行候ハゝ無程御勝手
御取直ニ可相成いう成賢者す覚の者すくも
被仰付計りにてハ大事ハ成就不仕ものゝ由懇
懇申聞候ニ付此言ヲ深く信用いたし様々工
夫の上此と志ヲ相立其後西尾縫殿へ勝向委
任仕自身ヲ責倹約取行候故前文の通追々其
効も相顕候趣ニ御坐候

一百姓ハ事ヲ常々申候ハ可憐すれハ百姓又可
恐すのハ百姓なりと右心持故常々農民の事
ヲ甚苦労ニ存放鷹の節供の者共末々迄田稼
の物ヲ誤て蹈不申様ニ自身毎々世話致申候

帰依寺見性禅寺の住持徳充と申老僧俗姓狩
野家にて善画ニ有之候ニ或時蓬莱の臺抔百
姓数十人にて持上け候図抔所望致淡彩にて
好く画れ申候其上へ頼恭自筆にて
蓬莱抔飾る其根を土百姓
と[illegible]し表装申付折々茶會の席へ相用ひ申
候よし

一近習其外側近く相勤候者共の内稀ニハ氣風
ニ合不申平生言葉も不懸かちにて首尾如何

哉と人々存候者も役替等申付候節ニ至り候
へハ其者の器量家筋ニ應し常ニ心安く召遣
候者と少しも無偏頗申付候又心安く召遣ひ
格別ニ心ニ叶候様ニ相見候者も不行状不身
持等の義有之候得ハ少しも無用捨役免申付
相遠け申候重臣初近習外様とも科有之退役
申付候ても其者行跡心持抔相改候へハ夫々
再勤申付無隔意召遣申候或時家柄宜く父勤
功も有之當時重役相勤候者心得違にて甚不

国立公文書館
National Archives of Japan

身持の義有之候ニ付右の者目見の序側近く
呼候て自筆ニて可慎と認候物被遣申候處其
者深く恐縮の躰ニて退出仕候へ共其後身持
相改不申候ニ付不得止知行相減し退役申付
候是ニて打驚相慎候ニ付追々取立後ニハ再
重役ニ申付候総して父祖勤功御坐候子孫ハ
別して懇ニ召遣申候
一奥向ニて召遣候女共より申立候義ハ奥向の
事の外ハ一切取上不申候頼恭参府帰國の節

ハ播州室津迄船路罷越候例ニて平生家中の
者共出府仕候ニハ大阪迄通船の定ニ御坐候
處或年参府跡立ニ江戸へ召連候女共播州海
ニて難風ニ出逢何れも必至と覚悟仕候義有
之其後老女共より右難船の義申立以後ハ何
卒室津迄の通船ニ申付呉候様歎願申出候頼
恭申候ハ女共の義故深き思慮も無之申處一
通ハ尤ニ候へ共大切の家中の士共大坂迄の
通船ハ定りたる事なりそれニ女とも被室津

近の通船ニとハ申付らるゝ事ニかゝはりぬと申
候て取上不申候より
一於江戸供の行列随分幅狭く致少しも往来の
妨ニ不相成様ニと度々申付候依之供の末々
喧嘩口論等の義一度も無之候
一聖学専崇仕常々儒臣共ニ経書講釈仕を承り
夜分ハ貞観政要なと読を承り申候儒臣共ハ
毎日毎夜居間へ罷出身近指置書籍の話聖賢
の言行或ハ古今諸家君臣の善政善行等の話

仕を承り宴席ニハ必儒臣召加へ放鷹其外山
水遊観等の節も数人召連申候右ニ付儒臣共
も聊不相憚諫言仕宴席等ニても容衆の興致
醒し候程の義有之一時ハ不機嫌ニ相見候て
も追てハ甚賞美仕相親候義始終相変不申候
又在江戸ニハ肥後の秋山儀右衛門水戸の名
越十蔵なと不断相招儒臣ともゝ一同講書談話
等仕を承り申候
儒臣中村彦三郎文輔と申者ハ右儀右衛門

十蔵無二の知己ニて殊の外忠直の者ニ御坐候老年迄妻ヲ娶不申候故傍輩共不審ニ存候て其主意相尋申候へハ本邦の制武家ニハ諫官と申もの無之候間主君へ諫争し候ハ儒者の任と心得候大切の諫争もんとし一時妻子ありてハとかくに顧慮して本意の如く諫免得さる事も有之しいつれも祖先の家ヲ継し人々ハ妻子なくしてハ祀ヲ絶ニ至不孝なれハ是非なし某ハ文学ヲ以て出身し祖先の家ヲハ弟して継させれハ祀ヲ絶の患もなく候間生涯妻妾ともニ不用のよしニ候と相答候よしヶ様の心得故別して常ニ忠諫ヲ尽し候て其益不少候由尤不断側近く罷在万事直ニ申聞諫書なとも無之候間如何様の義ヲ申立候哉存候者無御坐候右彦三郎義ハ使番の格ニて三十人扶持遣し御坐候處先代以来數十年忠勤仕候ニ付知行ヲも宛行可申頼恭内意の趣

代粗承候て儒者ニ世禄と申ハ甚いわれ無
之事ニ候只月俸ニて事足り候其子不肖ニ
候ハヽ父の勤功ニ依て少々の月俸給りて
可然候世禄と相成候ハヽ不肖の子ニても其
俸給り候様成行候故次第ニ学者の励薄く
相成大ニ國家の損ニて候と諫言申候て
其事相止候由ニ御坐候彦三郎妻子無之候へ共後ニ頼恭内意
代以養子仕を家相續申付候此後代々儒臣ニ知行宛行候
義相止ニ申候

又儒臣岡井郡大夫孝先郡大夫張子ニれも文輔と同く秋山名
越と無二の知己ニて御坐候青葉傳兵衛士弘岡平蔵長祐
後藤弥兵衛世鈞菊池八右衛門武賢深井清
右衛門奥祖中村彦蔵弘道文輔養子實ハ奥祖子なと
皆當時の名儒ニて後代迄かくれなき者共
ニ御坐候就中郡大夫弥兵衛義ハ彦三郎同
様常々側近く召遣啓沃の効も不少候よし
申傳候

一 一世の内出頭人と申もの一人も無之候側向

ニて召遣候者抔取立重役ニ申付候者も有之
候へ共何れも其器量有之候者故諸人至當の
事と存候て怨ミ猜ミ申者無之候由

一　一世の内側向相勤候者共抔強く叱り申候事
一度も無御坐候由然共家老共より下々奴輩
ニ至迄畏服よの常ニ無御坐所謂威有て猛か
らずと申ニて可有之と諸人申合候よし

○國政向の義ニ付適家老共存念別れ有之一決
不致義有之時ハ面々の存寄無遠慮委細ニ書取
候様申付指出さ熟覧の上各存寄一理有之候間
篤と勘考可致旨ニて書面留置可否不申聞追て
ハ全く自分存寄の趣ニて其品指図致双方の是
非不相分候様取扱遣し候義度々御坐候由右様
の節ハ其跡ニて必双方一同ニ呼寄茶事ニて懇
話致何となく人々見込存寄ハ様々可有之事也
其理の可否ハ兎も角も互ニ不馴合存寄抔真直
ニ申候ハ誠忠の志頼母敷なとし何れも賞美の
趣故存念相立不申者も面目抔失ひ不申無てハ

互ニ申募リ候事モ聊遺恨ニ不存ぜれ切ニ消散
致後々勤よし誠ニ功者ノ取扱と家老共モ感服
仕候由
○實父大学頭貞頼義ハ武勇ノ名誉武術ノ修練
世上ニ隠れ無御坐候頼恭廿九歳迄實父手元ニ
て教育ニおゐて申候間武事ハ兵学弓馬剣鎗
以下悉く鍛錬堪能ニ仕候書ハ古法帖ヲ臨し候
て巧妙、ヲ極メ其外物産学音楽茶事蹴鞠猿楽等
何れモ堪能ニ仕候

○在國中春秋ノ好時節ハ申ニ及ハス夏冬暑寒
ノ厭なく放鷹川狩池沼ノ漁猟等ニ供廻リ手軽
ニ致辨當持さ候て度々羅越或ハ小船ニて近海
へ釣網猟ニも羅越候別して寒天ノ砌ニハ雨雪
ノ嫌なく暁出立乗馬又ハ歩行ニて往還七八里
十里計ノ地へ放鷹池沼猟事等モ参深夜ニ帰候
義モ毎々有之先年迄怠リ不申候鹿狩モ度々仕
自分射留打留モ仕候扨又城内並別荘栗林園中
ニ舊来荒蕪ノ地御坐候ヲ寶暦ノ末頃より追習

の者ハ申付開墾仕と自身ニも日々野服辨當ニて是
又寒暑の厭ひなく早朝より罷出指図仕共々相働き
両三年中ニて夫々開墾成功仕菜園薬園茶園花壇等
出来折節の手作の品々重臣近臣なとへも遣し
申候右何れも慰一と通ニてハ無御座近習の者共
寒暑風雪を冒し候て身躰を鍛ひ遊惰を戒候て
自然ニ節の心得ニ仕と候義の由家中外様の者
共もいつとなく右の風儀ニ相習ひ奢侈遊惰を
相慎專質素を守り閑暇の節ハ腰辨當ニて海川
池沼の漁猟ニて身躰を鍛ひ寒暑風雨の艱難をも
厭ひ不申風俗ニ相成候由

○頼恭詩歌各一首

奉謁

崇徳天皇廟

一従仙蹕出京畿　遺廟陰深鎖翠微維昔
玉牀餘感慨至今金榜有光輝乾坤終古山長在松
檜多風雲不歸宇内幸逢垂拱日千年祭祀肅　天
威

神社

かけてみよかみのみさしくすまれゝはまつ宮居あり紀杜の志め縄

一頼恭代名臣の多き前後ならひ無之義ニ御坐候中ニも家老肥田半兵衛政朝西尾縫殿忠顕木村亘季明岩島主膳義絃奉行間宮武右衛門綱寛町奉行中村茂右衛門孟明郡奉行西岡與兵衛愛親なと皆忠誠無二の者共ニて其功績不少後代迄誉を残し候義ニ御坐候

一頼恭代平賀源内國倫と申者御坐候小臣ニて勤仕日浅く願申て暇遣し江戸ニ寓居し候間元より政教ニ関し候事ハ無之候へ共聡敏奇材世ニ雙なく天下ニ名誉を顕し候者ニ御坐候

六代讃岐守頼真

頼真義ハ頼恭嫡長子母ハ細川越中守宗孝妹ニて出生より嫡子ニ相定め寶暦七年丁丑十五歳ニて父頼恭同様溜間詰相勤明和八年辛卯廿九歳ニて家督相續仕候

○家督翌年安永元年壬辰八月領中稀なる大洪水ニて高十万石餘半所務國民共へ大分の銀米救ひ遣し候中同年十二月
女御入内ニ付幕府より京都への御使被仰付相

勤其餘品々不意莫大の失費有之且又打續米價至て下直ニて勝手方の歩ミ大ニ跡戻りニ相成申候前々家督後初て入部の節ハ家中初へ為祝儀相應り遣し方致猶又家中より社人出家郷町の長より者迄も召寄料理振廻候仕来ニ御坐候慶安永二年春初て入部同年秋参勤同三年再度帰國致候へ共右等の義も延引仕候然共頼恭深慮を以相備置候軍國用意の貯金へハ手を懸不申候前々京都へ御使相勤候節ハ領中へ用金借り金等

申付候へ共壬辰年ニハ其義無之候尤西尾縫殿義頼恭末年病死右跡勝手方の義家老岩島主膳と申者へ委任仕候ニ付頼恭の遺意を受継縫殿致来の通堅相守他事なく儉約取行申候

○安永五年丙申六月十五日三度目帰國同十八日家中一同呼出し家老共を以左の通り申渡を候

先代深慮有之年来重儉約申付候處其後家督早速京都御使相勤物入有之候ニ付年限を以格段

之儉約申付今以右年限中の義其上不足も有之
候へ共先代以来存寄の旨も有之候ニ付入用方
儉約の義ハ諸事是迄の通申付家中渡り方ハ此
度四ツ成ニ直し遣候勤方人持并借銀引納方の
義當分令用捨候間先只今迄の通相心得可申候
法令條目の舊式專相守衣服等の義元文年中以
来相定の通諸事分限より輕く華美ならぬ義堅相
慎常々儉約致用ハ武用怠られ弥忠孝致励技藝
可申候 十八日ハ頼恭忌日ニ付此日致以申渡候由ニ御坐候

同十九日當年中入部の祝儀として家中以下へ
料理振廻可申旨一同へ申渡を候 十一月十五日十九日廿一日
廿三日於城内館申付家族并家中隠居嫡子近御
朱印地并領中の社人出家郷侍共見物致を料理
振舞郷町々役義相勤候者共并家持
町人於白砂見物赤飯酒等振廻を申候 同日儉約
ニ付數十年中絶致居候年頭の礼ニ重臣共太刀
目錄其以下鳥目披露盃遣候義并謡初嘉祥玄猪
等の儀式此後作法の通可仕旨申付候 正月十一日具足の
鏡餅相調候祝儀ハ儉約中なからも引續相行ハ申候
同廿日家中一同へ此度四ツ成ニ相直し遣候へ

共猶又格別の存寄も有之候ニ付軍用手當金の
内遣候間所持の武器の修補可致旨申付候重立候者
へ銀三十枚ツヽ其以下二十枚七
枚金三両銀三枚等差御座候
同廿一日小身ニて江戸の供仕候者共町方ニて
借宅等致居所難渋の者も有之様相聞候ニ付新
規ニ長屋六棟取建貸渡候旨申付
同廿二日先代相勤候者の跡式子細有之及中絶
居候者廿五人呼出し相應ニ遣申候
同廿三日大小役人共の中宅ニて役所相立又ハ

役義ニ付失費多の者共數十人へ毎歳金銀并手
前抱中間の給料加扶持等向後遣候旨申付候同
日入部の祝儀として総百姓共へ當月相納候勘
定米代銀壱石ニ付壱匁宛下け遣し領中正租八歩ハ其年十
一月限正米ニて相納残貳分ハ翌年六月限時相
庭成以代銀ニて相納を申候是成勘定納と申候
并近年痛の百姓共へ度々貸し遣し納残し米六
千五百石納方指免申候
右ハ頼恭一世の間節倹取行ひ漸く勝手向取直
し候ニ付追々施設方相會居候次第も御座候へ

共志ハ不遂死去仕尤厚く申置候趣も御座候旁
其遺志ハ継述仕候義ニて臣民共ニも先代以来
の恵ハ深く感佩仕候由ニ御座候以上の事とも
相綴候文章一篇僧人の所録ニて如何ニ御座候
ヘ共当時の事實ハ覩可申かと存ニ付左ニ附録仕
候

丙申紀事

神祖撥乱右文以來殆将二百年矣徳政之所致風
易俗移士大夫講武之暇学經史而輔治者諸州比
比有之流風遂及庶人其間亦有俊傑之士出焉誘
之闡之至州有泮焉家有塾焉是以咿唔之聲上至
閥閲下満閭閻管絃歌頌之音延及四裔方此時也
陰陽相和雨暘若時黎民謳咩而耕撃壌而歌竊顧
雖三代之治而亦不多譲也然而文化之弊必流浮
靡浮靡成風則必生驕侈於是乎通邑大都以至州
郡亦倹以救其弊而猶陽倹陰奢者滔々天下皆是
是故窮困日逼至有不可如之何者多焉則其窮必
生乱倹之教其可忽乎吾先君穆公欽若台命身自

守儉欲以及衆謂夫儉也者古先聖王之治具而非
適今也固人情之所厭則亦非容易之事也非能得
忠良剛毅之士則不能救之選衆得西大夫乃從事
於斯惜矣其功未遂不幸而没紹之以巖大夫大夫
為人廉直公正修己誘人其屬吏皆被星而出戴月
而入孳々節儉是索惟日不足凡利於國家之事益
無所不為也而下民還謂典有如此聚斂之臣寧有
盗臣大夫聞之笑曰所謂燕雀安知鴻鵠之志鐵石
之心膓確乎不可抜其志將以大有所為故紛々謗

議馬耳過風如此十數年如一日矣其所為似苛刻
而公正故無有怨望之者矣加之仁政之所感屢有
大有之年而倉廩充府庫盈蓋天之廣大雖不敢私
一方而降祥之休徵斯顕乃可見矣今茲安永丙申
夏六月望公帰自述職越戊午大召群臣加俸一等
被服如故勿益僕馬（舊制俸至四則隨祿之高下衣帛益僕馬）已未又召
有賜食之命庚申復悉召賜金有差教令曰居安不
忘危士之常也堅爾甲冑利爾戈矛講武而後有餘
力則可以学文忠孝自在其中若夫恃恩賜而驕侈

猶不已則貧困透骨噬臍何及愼終于始唯儉是守
徼哉辛酉呂小臣之在于市廛之間者賜第壬戌呂
禁錮落魄者數十人新賜祿位殊肉於枯骨之仁也
癸亥呂封內之村長賑十郡之詆民波及孤獨廢疾
者而后群公子群公姬而媵妾陪臣而奴婢僮僕賜
金銀米粟有差今夫恩澤之被封內也如時雨之降
如陽春之有脚也士庶人之喜而後可知矣想誰有
不敢欲盡力致身而以答君恩者乎哉且也諸以先
君之忌日者蓋行其志也縱雖既底法而不肯堂構

則其室由何成古曰知人惟難先君能知其人且創
其業今公能守其成委任而不疑是以得有此擧可
不謂繼賢以明哉若夫政治之儉以救其弊諸州往
往雖有之聞其有初而未見其有終吾邦今已致之
譬如鹿西大夫角之巖大夫掎之固雖曰兩君之賢
明二大夫亦可謂勤焉詩曰不解于位民之攸塈其
斯之謂與貧道雖身在象外見此盛事喜而不寐剪
燭於閑窗記其梗槩云

讚岐高松府大本寺日謙識

乙巳中秋余同諸友始謁観上人於本妙寺乃
相共緩飲般若湯而賞月賦詩詠和歌玄談垂
三更發興可想焉時上人出紀事一篇示余曰
此吾先師所著手澤稿本而故國之政事也貧
道不謹不圖脱篇末一紙令而尋繹之獨記不
寀二字而已且有断章之詩貧道乏記性詩尚
不諳為何句况其文辭如癡人説夢貧道不肖
不能補一字又無別稿之可考先師之墓木已
拱未如之何遺憾無限頼予之冨文辭請為承
此言續之余捧讀再三其事策勲之大業而郁
郁乎古文未下東漢始歎梵臺有良史材乃笑
曰上人欲使我為郭子玄乎合誰欺々天乎上
人曰子言誠然々故國親明聞先師嘗著此篇
往々就貧道請寓目獨此篇之不全輙困答辭
子代之余曰然則貂之不足續以狗尾不如記
其事於後上不欺天下不寃尊師於泥洹乃撈
其文還不日卒業乃名其篇曰丙申紀事返壁
蓋余所補自篇末曰若夫政治以下是也君子
勿以薫蕕倚玉罪我其先君穆公諱頼恭字子
敬號白嶽従四位上左中将兼讃岐守世食封
于讃之高松今侯名頼眞従四位下左少将兼
讃岐守西大夫西尾縫殿忠顕秩五百石巌大
夫岩島主膳義絃秩四百石観上人先師名日
謙號雲廬大本寺主
天明乙巳冬十月　越前角鹿新野西雄識

○安永七年戊戌十月十五日先代以来深慮も有
之候ニ付今以勝手向指支中なしくつし押て家中物
成作法の通相渡と候へ共猶又先代以来厚く存
寄も有之當年ハ収納方順能候旁四ツ成渡方の
外ニ歩通遣し候尤平生配方難届所も有之候へ

共其義ハ猶倹約無怠取行を可申候尤寛文十一
亥年より平均四ツ成の渡方ニ相極永年の定法
ニ付此度の義以後の例格ニして不相成候間此上
倹約相守可成程ハ武器の手入成とも致相嗜置可
申旨家中一同へ家老共より申渡を候（此時の遣し方高知の者へハ高百石ニ付三石小知の者へハ百石ニ付四石遣し末々切米取の者共色々差別有之候へ共知行取よりハ割合宜しく遣し申候）
○高松の学館成講堂と号候ニ代頼常創建致士
民文教の義厚く世話仕候へ共勝手向指支重く
倹約申付候折柄の建立にして其規摸狭少ニ御坐
候ニ付五代頼恭再建の志御坐候へ共是又永々
の不勝手にして行届不申頼真義右の遺成継候て
安永八年己亥在来ニ倍し候学館成造営致講道
館と号し同九年庚子正月十五日開業申付文学
の義ハ勿論兵学音楽武家の礼式等定日成立講
習致を習字并剣術の技成も右館中にして日々相
学き申候且又毎月定日相立家老共部屋へ儒臣
罷出経書講釋仕諸役人出席聴聞仕候様申付候

家臣三木丹次と申者講道館の記を撰申候
維安永九年庚子歳修造學宮於城南菅廟北蓋継
先公之志也初先君節公始開講堂於南郊講經論
道大布文教先君穆公大有意於修営学宮會凶旱
水溢相継國用不足一切止土木之費以故不果及
今公襲封年穀數熟國用漸足於是宮成名曰講道
館廣裒倍舊乃命儒臣輪流講經史軍職講武經或
詩或禮或樂分日教之息焉遊焉且選其德成材達
而学優者特使之講經於朝畢而後聽政於是老臣
有司百執事無不崇聖重道粛敬戒慎矣館之北闢
二榭為演武場西習交槍東教撃劍門外東北有習
騎之埒西南有試射之圃就学受業者日來講習其
文武粲然有雍和之氣也夫三代之設学也達其材
成其德而以化民成俗也禮樂刑政於是乎出孝悌
忠信於是乎與教育英才以濟此民於是乎成秦漢
以来儒與吏異趣教與政殊途吏依簿籍以治民儒
持詩書以教授二者漠然不相為謀殆二千年矣空
有建学之名而無弘道之實而我國之與学也教之

於學以成其德達其材延之於朝以崇其教輔其政是儒與吏同道教與政惟和遠踰秦漢稱三代設学之意乎禮楽刑政於是乎出孝悌忠信於是乎與教育英才以濟此民於是乎成若夫釋奠之儀養老之禮又待年數豊國漸富以與之乎我喜其儒與吏同途教與政惟和華弊於千載稱先聖設学意謹作記云

○安永九年庚子三月五日三十八歳ニて於江戸死去仕候頼眞天性孝謹ニ御座候て在職十年の間万事父頼恭の成規を相守専其遺志を継述仕候て士民へ仁恵相施し申候家老初諸役人近臣迄も老病死亡の外ハ先代ニ申付候者を其侭召遣申候家督の砌祝儀客来の節相用ひ候椀具并道中ニて相用ひ候椀具雜當の類先例の如く新調申付候趣ニ役人共取計候由承り今度ハ存寄候旨有之候間椀具雜當并箸迄も頼恭相用ひ来候を其侭相用ひ可申候但此後代替りの時の例ニハ致間敷旨申付儒臣野村又十郎と申者頼眞墓

記或撰申候其末ニ公性謹倹不喜奢侈及襲封政
由穆公舊加以仁恵興學修教國中殷富民懐其徳

七代讃岐守頼起

頼起義ハ五代頼恭第四子頼眞弟ニテ御座候頼
眞重病の節實子雄丸（八代頼儀事）幼年ニ付頼起ヲ養
子ニ仕度段相願置死去仕候安永九年庚子三十
四歳ニテ頼眞願置候通養子ニ被仰付遺領相續
仕候

○安永九年庚子初テ入部の上毎月定日相立城内
中書院へ儒臣共罷出講釋仕候様申付其度毎出
座家老初役人共も罷出聴聞仕候尤在江戸

留守中ハ是迄の通家老共部ニて講釋仕と候且
又先代再建致候講道館へも度々罷越講釋承り
當日出席の者共慰労仕候義生涯相怠り不申候
○天明二年壬寅十一月廿日番頭初侍ゟ支配仕
候頭立候者共支配之者武藝出精致と當職ハ勿
論子弟末々迄方ハ総矢場ニて一ヶ月三度乗馬
ハ於馬座馬場一ヶ月一度槍剣ハ於頭々宅一ヶ
月一度見分可致支配外の者ニても師匠相弟子
の手筋ニ罷出度由申候ハヽ是又見分可致旨申

付候
○安永九年庚子天明四年甲辰同六年丙午以上
三度家中知行物成定法四ッ成の外ニ高百石ニ
付三石宛の割末々迄其割ゟ以遣申候
○天明八年戊申四月十九日幕府御入用多ニて
御指支の御様子ニ内々承知致候間御用向も有
之候ハヽ相勤申度相應の御用被仰付候様致度
段老中松平越中守へ申達候五月朔日右内意の
趣申上候處御満足の御事ニ候御用も有之候者

其節御沙汰可有之旨老中鳥居丹波守申渡候
○寛政二年庚戌夏旱蝗ニて高四石の所枯捨り
七万石餘の所半作ニて収納方大ニ相減し候へ
共百姓共難渋ニ付米五千五百石貸し遣し右の
内三千石ハ年賦返納弐千五百石ハ納方當分用
捨申付候
○寛政四年壬子七月廿八日四十六歳ニて於高
松死去仕候頼起生質慈仁謹倹文武ニ長し其外
多能ニ御坐候頼眞富庶の業為紹襲候て万般不
足も無御坐候へ共元来寡欲倹素ニ御坐候故聊
奢侈の義無之士民撫育も行届候て各其業為安
し行ハ上下何の憂も無御坐候へ共士民とも安
逸の餘り自然遊惰ニ相流れ候弊も御坐候哉ニ
承傳申候

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan